

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：64303

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K18354

研究課題名（和文）超高齢化する集落における文化芸術の創出と表現の高度化

研究課題名（英文）Creation of cultural arts and sophistication of expression in super-aging villages

研究代表者

三村 豊（MIMURA, YUTAKA）

総合地球環境学研究所・経営推進部・研究員

研究者番号：90726043

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 5,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、超高齢化する集落での記憶の継承とinclusive wellness（みんながよいこと）を考慮した文化芸術の価値創出とその手法論を明らかにすることである。主な研究対象地は、高知県（大豊町・いの町）、京都府（綾部市）、沖縄県（久米島町）、香川県（高松市）、岐阜県（東白川村）の計6つの地域で実施した。本研究では、地域固有の文化芸術（絵本、演劇、ダンス、映像、工芸）の創出を目指すなかで、各地域で共通してシビックプライド（地域への誇りや愛着）が育まれ、個人の価値観の変化が他者への価値変容や行動の変化を促すことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義と社会的意義は、超高齢化する集落での記憶と継承を文化芸術として展開するなかで、理論的・実践的研究を、さまざまなステークホルダーとの協働による超学際的研究アプローチを通じて、1）地域社会の歴史的経緯への理解と総合的統合化、2）地域固有の知の芸術表現、3）人々の価値を扱う普遍的な現象の解明、4）シビックプライドの醸成に伴う価値創造の効果の把握を行った点にある。特に、社会的な意義においては、研究者らが客観的に観測・評価することで住民活動の今後の活動への意欲へとつながり、新たな地域資源の発掘につながる活動が芽生えたなど本研究成果は一定の評価を得られることができた。

研究成果の概要（英文）：This study aims to clarify the value creation of culture and arts, considering memory inheritance and inclusive wellness in super-aging communities, as well as the methodology for achieving this goal. The main research sites consisted of a total of six regions. Otoy Town and Ino Town in Kochi Prefecture, Ayabe City in Kyoto Prefecture, Kumejima Town in Okinawa Prefecture, Takamatsu City in Kagawa Prefecture, and Higashishirakawa Village in Gifu Prefecture are all included. In this study, while aiming to create unique culture and arts specific to each region (picture books, theater, dance, video, crafts), it became clear that civic pride (pride and attachment to the region) was cultivated in each region, and that changes in individual values prompted changes in values and behavior towards others.

研究分野：建築学

キーワード：アート 地域研究 アンケート調査 コンジョイント分析 文化芸術 超高齢化

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

日本は世界でいち早く人口が減少し、内閣府の『平成20年版高齢社会白書』の報告によれば、2007年に高齢化率21%を超え、超高齢社会に突入している。一部の農山漁村では、都市への人口流出が頭打ちとなり、人口が自然減に転じている。特に、都市近郊の里山よりさらに離れた農山村集落では、連携中枢都市圏などの制度の恩恵がとりわけ少なく、より顕著で深刻である。このままでは、多様な社会で培われた地域固有の在来知の消滅へと繋がりがかねない。

本研究では、多様であるべき社会から創出される文化芸術が、地域社会の文化資源の継承を促し、新たな価値創造における端緒を開くものと考えている。地域社会での芸術活動は、イノベーションを起こす契機として地域社会にはたす役割が極めて高く〔熊倉, 2015〕、地域活性化への期待が高まっている。また、芸術活動の効果は作品づくりの過程で、住民らの誇りや生きがいにつながることも多い。芸術活動は、行政主体による構造改革とは異なり、住民の価値観に働きかけ、生き生きとした暮らしへと導くものである。一方、「地域アート」を謳う活動の一部には、芸術が道具として利用されることで、地域社会の延命措置と厳しく批判され、やりがい搾取などさまざまな問題が顕在化している〔本田, 2011; 藤田, 2016; 黒瀬, 2017〕。改めて、地域での芸術の解釈、学問的な知識の融合と適切な分析による実践科学の蓄積が必要である。本研究では、芸術・地域研究、それに関連する学問・社会実践の融合に対し意味のある問題提起を目指す。

これまで、研究代表者の三村、研究分担者の石山と市川は、2016年より高知県長岡郡大豊町で共同研究を開始し、2018年には『超学際主義宣言 - 地域に人をどう巻き込むか?』を発行した。さらに、2018年度高知県文化財団の「KOCHI ART PROJECTS 2018」の助成事業（「地域のための民謡づくり - 『たらしめことば』の語りとアートの実践」代表：三村豊）に採択され、地域住民・大学・研究者・アーティストの4者が協働して唄づくりのワークショップを行った。ワークショップでは、文化人類学・建築学的な集落調査手法を参加者が学び合い、住民への聞き書きや集落歩きを通じて、5つの「集落の唄」を完成させた（ホームページ：<https://www.nuta.idatabase.info/>）。

超高齢化する集落の地域資源を理解するには、人と自然の営みによって集落風土が形成されていることを考慮すれば、「社会(人と人のかかわり)」「生態(人と自然のかかわり)」「風土(人・社会・生態とのかかわり)」およびそれらの歴史的経緯への理解と総合的統合化が必要となる。そこで、本研究では、「社会・生態・風土」の表現に根源的な手掛かりがあると考え、学問的、社会的意義の追求と多様なステークホルダーと連携した社会実践を試みる。つまり、本研究の社会実践は、文化芸術の創出を通じて、地域固有の知の芸術表現であると同時に、人々の価値を扱う普遍的な現象の解明である。特に、集落の課題と芸術の課題を同時解決するという点で先駆的、挑戦的な研究でもある。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、今後とくに継承することが困難で消滅してゆく地域固有の知である文化資源（風土としての環境、生活の知恵や技術、歴史的価値である言葉など）の記録を通じて、新たな文化芸術の創出とその手法論について明らかにすることである。本研究では、地域住民・大学・研究者・アーティストの4者が協働した学問的なフロンティアを開拓する超学際的アプローチを通じて、価値観の転換および社会変革を促す芸術存在の構造契機の実態解明を目指す。具体的には、1) 地域固有の知の把握と文化資源の収集、2) 文化資源の分析とそれを活用した文化芸術への展開、3) 聞き書きやアンケートによるエンゲージメント（つながり、誇り、愛着）調査を通じて価値変化のプロセスを明らかにする。

本研究活動は、文理融合による研究の蓄積と文化芸術を手掛かりに、超高齢化する集落の知の記録と継承、その過程のなかで新たな価値創造に働きかけるものである。参加者それぞれの、学術・芸術専門領域から、多様な形の可視・可聴化（学術論文、その他文章、映像、写真、音楽、劇など）が可能となり、そのプロセス自体がオープンサイエンス・超学際的研究の発展と構築に結びつくと考えている。

## 3. 研究の方法

本研究が特筆すべき点は、1) 超高齢化する集落で、2) 超学際的アプローチによる文化芸術の創出とその方法論を明らかにすることである。この研究蓄積が、3) 価値観の転換および社会変革を促す芸術存在の構造契機を明らかにできると考えている。

本研究を遂行するため、高知県長岡郡大豊町および吾川郡いの町、京都府綾部市睦寄町、岐阜県加茂郡東白川村の超高齢化する地域を研究の対象地とした。また、その他にも、香川県高松市や沖縄県島尻郡久米島町で伝統や環境に配慮した工芸品の制作における参与観察を実施し、合計6つの研究対象地で文化芸術の創出にかかる記録と継承の研究活動を行った。本研究は、さまざまなステークホルダーが異なる知識や経験、これまでの先行する活動の蓄積の上に、研究および社会実践を深化させる研究体制で実施した。研究体制は、建築学・地理情報システム学（三村）、農学・地域研究（市川）、文化人類学（石山）による文理融合での研究、さらに研究以外の社会実践を支援する協力者には地域実務者、画家、演出家、俳優、映像作家、アートコーディネーターに協力を依頼した。具体的には、以下の研究方法で実施した。

#### (1) 超学際的アプローチによるキャパシティ・ビルディングの構築

地域固有の知の把握や文化資源の収集は、地域社会で活用できる資源を発見する必要がある。研究活動の期間では、その都度、集落に還元する研究活動の仕組みを整理し、それぞれの地域でフィールドワークを通じて文化資源の概念整理を行う。特に、研究活動や芸術作品の制作によって地域社会だけが不利益を被るような一方的な関係ではなく、双方向にとっての便益につながるキャパシティ・ビルディングの構築を重視した。

#### (2) 地域固有の知の収集およびデジタル化

地域固有の知の収集では、聞き書きやインタビューで得られた情報をもとに文化資源の特定を行う。地域で得られた情報は、各地域で文化資源に対する記憶や思いなどを整理した。また、各家庭で保管されていた映像や白黒写真(古写真)の整理を通じて、デジタル化およびその情報共有によって住民の記憶の掘り起こしや集落風土の発掘など集落理解に役立てた。

#### (3) 学問と芸術の融合における表現の社会实践

本研究は、研究者のみならずさまざまなステークホルダーとの関わりのなかで研究活動を遂行した。学問と芸術の融合では、地域に適した文化芸術を創出する際に地域住民にとって過去の記憶と現在の暮らしの風景を多層的につなぐ表現を議論して選定した。例えば、研究活動の成果では民話(伝説)をもとにした絵本や民藝(和紙)をもとにした演劇などである。各地域で実践した表現は、フィールドワークに基づく知見が基礎であり、文化芸術の制作過程においてさまざまな価値が生まれ、芸術存在の構造契機が芽生えるものと考えている。

#### (4) 集落内外におけるエンゲージメント調査の実施

本研究では、常に芸術・成果発信とその効果の計測を並行して研究活動を行ってきた。高知県の大豊町では、集落で暮らす住民への聞き書き(期待価値モデル)に加え、集落外で暮らす出身者へのアンケート調査(コンジョイントモデル)によるエンゲージメント(つながり、絆、愛着)の調査を行った。本研究では中山間地域の集落調査であるとともに、超高齢化する集落が抱える課題の解決に向けて研究を深化させることも目的の一つである。

#### (5) 表現の高度化および手法論の構築

専門的知識を有している人材が集まるだけでは、本質的な問題解決および学問の発展へとつながらない。そのため「研究・芸術・実社会」によって育まれる文化芸術を念頭に置き、フィールドワークの手法から地域社会に貢献する表現方法、さらに波及効果までをまとめた手法論の構築を目指す。

### 4. 研究成果

本研究では、6つの異なる地域において社会实践とそのフィールドワークに基づくアクション・リサーチで実施したため、各地域で研究成果の進捗状況が異なる。特に、人々の価値に関する効果の計測は、長期的な影響と変化を明らかにしていかなければならない。そのため、本研究における研究結果は、地域社会での波及効果を分析・計測する際、時間軸を考慮した価値観の変化に着目した。先行する研究では、デザインの理論や方法論に時間軸の概念を導入する「タイムアクセス・デザイン」と呼ばれ、価値の特徴として「価値発見期、価値実感期、価値成長期、価値定着期、価値伝承期」の5段階で抽出する価値成長デザインモデルが提案されている[佐藤・松岡, 2012]。本研究では、価値成長デザインモデルを援用して、以下の通り研究成果を整理した。

#### (1) 高知県長岡郡大豊町

高知県長岡郡大豊町では、異なる2つの文化芸術に関する社会实践を行った。まず、人口が80名ほどの中山間地域の集落では、これまで「集落の唄」を作成した(価値実感期)。その後、集落住民や他出した血縁者たちが共有するため、歌って踊れる盆唄にしたいという要望を受け、振り付けをつけた盆唄を作成した(価値成長期)。本研究課題の期間では、集落内にルーツを持つ他出した血縁者を対象にアンケート調査を実施した。アンケートの質問は、年齢や性別、家族、収入源などの基本的な情報に加え、屋号の認知度や集落への里帰り状況、未来の集落のあり方を探る指標を項目として挙げた。分析ではコンジョイント分析を用いて環境サービスにおける集落改善の状況の評価した。



ダンスワークショップの風景(大学や社会福祉施設の方が主体的に活動を支援する)

もう一つは、盆唄を通じて健康への関心が高まり、ダンスワークショップの要望がでたため、新たに地域住民を対象にしたワークショップを実施した。特筆すべき点は、唄(盆唄)からダンスへという踊りの形式が変化したこと、運営実行者がよそものから地元住民へと変化したことである。文化芸術の効果として、新たな活動へとサイクル(価値成長期から新たな価値発見期へ

の転換)していくことも文化芸術の創出が果たした役割の一つと言える。

### (2) 高知県吾川郡いの町

高知県吾川郡いの町では、「土佐和紙未来プロジェクト」を主宰する濱田あゆみ氏の協力を得て、小中学生を対象にした演劇・ダンスワークショップの参与観察およびアンケート調査、映像作品の作成を行った。いの町は、伝統工芸品の土佐和紙が製造されており、その歴史は1000年以上続くとされている。ワークショップでは、小学生が「平和と和紙」、中学生が「戦争と和紙」をテーマに表現した。小中学生は、実際に和紙に触れて体感して、地域住民とのインタビューをもとにしたダンス・演劇作品を発表する。こうした地域の記憶を継承する次世代の担い手になるような取り組みの効果として、双方向への影響が見られ、地域住民の連帯感を育むことが明らかとなった。特筆すべき点は、地域資源である和紙を題材にした文化芸術(ダンスや演劇)ではあるものの、アンケートやインタビュー結果では、戦時中から最近まで言えなかった負の遺産や感情を記録する意義など新たな価値の発見につながる点が挙げられていた(価値発見期)。つまり、文化芸術において必ずしも段階的な価値成長へと発展・変化しない場合があり、シビックプライド(誇りや愛着)の束が育まれる場合があることが明らかとなった。本地域では、参加した子供たちの成長を記録することで新たな研究シーズが生まれるため、本研究課題終了後も継続して研究を行い、研究を深めていきたい。



地域資源(和紙)を活用した演劇ワークショップの実施(高知県いの町:土佐和紙未来プロジェクトと協働)

### (3) 京都府綾部市睦寄町

京都府綾部市睦寄町では、地域で傳承されている「柘神伝説」をもとに絵本の作成を行った。対象の睦寄町の集落では、2世帯3名が暮らし、綾部市の行政職員や市内外のボランティアのサポートによって集落が維持されている。これまで研究代表者は、定期的に集落を訪問し、聞き取りやボランティア活動を行ってきた。本研究に先駆けて、集落紹介の映像(<https://www.youtube.com/watch?v=xI5JnJjVPWw>)や特産品のとち餅の工程をまとめた冊子を作成してきた。こうした研究活動を行なっていく中で、集落住民から「集落に伝わる柘神伝説を絵本にしたい」という要望を受け、2024年3月に『古屋に伝わる柘神伝説 キヨとトチ神様』を発行した。特筆すべき点は、地域住民らの記憶や価値の傳承に対する思いには、すでに成熟した価値観が育まれており、絵本作成の目的は、対象が他者(子供や関係人口となる訪問者)への発信であった。つまり、今後は、絵本を通して人との関わり合いのなかで新たな価値(価値発見期)が育まれることが期待される。研究課題後は、絵本を活用した紙芝居や原画展などを通じて、集落住民とさまざまなステークホルダーの思いを記録・分析する予定である。



民話(柘神伝説)を題材にした絵本の作成

### (4) 岐阜県加茂郡東白川村

岐阜県加茂郡東白川村では、映画監督の今井友樹氏の協力を得て、地域資源(つちのこ)を題材にした映画上映会とその出演者(地域住民)を交えた座談会を実施した。今井氏は、9年間かけて故郷である岐阜県東白川村や奈良県下北山村で取材・撮影を行い、「つちのこ」という不確かな存在のなかに地域資源を見出し、人々の想いや地域活性化の活動を記録してきた。本研究課題では、映像の記録および公開に伴い、人々の価値変化の分析を行った(価値実感期)。全国上映前の先行上映会では、今井氏の地元東白川村で行い、その後出演者らと座談会を行った。特筆すべき点は、映画出演者にとって「つちのこ」とは、「いるか、いないか」という2元論ではなく、「つちのこ」を通じた体験と地元の原風景をどのように維持・継承していくか、その責任感の再認識が地域の誇りとして現れていた。特に、地元住民にとっての地域資源(つちのこ)は、すでに価値定着期といえるフェーズにあるものの、住民の思いは、「うそつき村」と呼ばれた過去の記憶からうしろめたさが見え隠れしていた。価値定着期では、必ずしも価値が良い方向へ示さないことも明らかとなった。



映画出演者との座談会(記録映像)

### (5) 香川県高松市

香川県高松市では、文化芸術の概念化の整理・比較のため民芸と工芸に着目し、とりわけ漆芸の教育と継承の記録として、香川県漆芸研究所で学ぶ一人の若手漆工芸作家を対象にドキュメンタリー映像を作成した。漆芸は、日本の公的機関である石川県の輪島（石川県立輪島漆芸技術研修所）と香川県の高松（香川県漆芸研究所）で学ぶことができる。若手漆工芸作家を通じて、香川県の伝統的な3技法の「蒟醬」、「存清」、「彫漆」について聞き取り、漆芸の技法がどのようにして継承や発展に寄与するのか、その意義について映像記録を行った。高松市での研究活動は、他の地域での社会実践とは異なり、一人の作家から質的に文化芸術の継承における思いや葛藤を記録した。若手漆工芸作家のインタビューでは、伝統工芸を通じた文化の継承には、所作を如何に体现（憑依）できるか重要であると述べていた。作家としては3年目になるが、2024年には日本伝統工芸四国展において作品が受賞するなど、研究課題後も引き続きインタビューの記録を継続する予定である。



地域資源(和紙)を活用した演劇ワークショップの実施(高知県いの町:土佐和紙未来プロジェクトと協働)

#### (6) 沖縄県島尻郡久米島町

沖縄県久米島町では、自然環境の改善(赤土流出等防止)に資するワークショップを実施し、新たな工芸品を現地のアーティストとともに議論した。久米島町は、WWF Japan が主導して2009年から2012年の3年間、環境保全の取り組みを実施してきたが、赤土流出の課題は、未だ解消できていない。如何にして地域住民が主体的で環境保全に取り組めるか、環境保全だけを訴えてもうまくいかず、「正論だけが正解ではない」というWicked Problem(厄介な問題)に真摯に向き合わなければならない。久米島町の研究は、環境と人々の生活をより良いものにするため、地域住民が主体的に行動できる機会とシビックプライドを醸成させる長期的な社会実践が必要である(価値発見期)。研究課題中では、文化芸術を見出すことができなかったが、外来植物を使った工芸品を作成するなど環境教育とつなげる活動を引き続き研究する予定である。



環境教育ツーリズムワークショップの実施(沖縄県久米島町:久米島ホテルの会と協働)

#### <引用文献>

- 藤田直哉編著(2016)『地域アート美学/制度/日本』堀ノ内出版
- 黒瀬陽平(2017)「地域アートの延命措置」『美術手帖』美術出版社, 5月号, p.180
- 熊倉純子・長津結一郎・アートプロジェクト研究会編(2015)「アートプロジェクトの美的・社会的価値についての考察」『日本型アートプロジェクトの歴史と現在1990年-2012年』補遺』アーツカウンシル東京, pp.27-36
- 内閣府政策統括官(2008)『平成20年版 高齢社会白書』
- 本田由紀(2011)『軋む社会』河出書房新社
- 佐藤浩一郎・松岡由幸(2012)「タイムアクシス・デザインの具現化に向けた価値成長デザインモデルの提案」『横幹』6(1)pp.21-16

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>三村豊                                       |
| 2. 発表標題<br>「たらしめことば」の未来可能性-コンジョイント分析による他出した血縁者の価値観調査 |
| 3. 学会等名<br>環境芸術学会                                    |
| 4. 発表年<br>2022年                                      |

〔図書〕 計1件

|   |                 |
|---|-----------------|
| 1. 著者名<br>わたなべかずしげ（文）・あらせふみよ（絵）・三村豊（監修）・石山俊（監修） | 4. 発行年<br>2024年 |
| 2. 出版社<br>絵本「キヨとトチ神様」制作プロジェクト                   | 5. 総ページ数<br>26  |
| 3. 書名<br>古屋に伝わる柝神伝説 キヨとトチ神様                     |                 |

〔産業財産権〕

〔その他〕

|                                |
|--------------------------------|
| 三村豊・石山俊・城間典子（2024）「漆の世界」【映像作品】 |
|--------------------------------|

6. 研究組織

|       | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号）                     | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号）                                  | 備考 |
|-------|---|--|----|
| 研究分担者 | 石山 俊<br><br>(ISHIYAMA SHUN)<br><br>(10508865) | 国立民族学博物館・学術資源研究開発センター・プロジェクト研究員<br><br><br><br>(64401) |    |

6. 研究組織（つづき）

|       | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)                          | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号)                         | 備考 |
|-------|--|---|----|
| 研究分担者 | 市川 昌広<br><br>(ICHIKAWA MASAHIRO)<br><br>(80390706) | 高知大学・教育研究部自然科学系農学部門・教授<br><br><br><br>(16401) |    |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|         |         |